市立函館博物館
友の会々報　No.62

願乗寺川物語

会員　木村裕俊

1. はじめに

かつて、函館の中心を「願乗寺川」という川が流れていました。もう昭和生まれの人でもよほど歴史に興味を持っている人でなければ、この名前を知っている人はいなくなったのではないでしょうか。願乗寺川について函館市中央図書館で調べたら、函館市史や他の刊行本にもいくつか紹介されていましたが、中でも詳しく著述されていたのは『函館市水道百年史』(函館市水道局、平成元年)、『風雪の一世紀、函館市水道創設事業史料』(冨原章、平成２年)、『願乗寺川の一生』(神山茂、校正原稿形態・不詳) などでありました。本文はこれらを参考に調査し、まとめ直したものです。

幕末・安政の末頃に、願乗寺の僧法恵(ほうけい)（のち堀川乗経と改名）と土木事業者の松川弁之助が協力して人工的に作った願乗寺川は、明治の中頃まで函館の住民に飲料水を供給していた重要な川でした。

函館山は本来、陸地から離れた小島でしたが、その後に陸地との間が砂洲で結ばれた地形となった所です。ですから、そこは元々人の住めるような所ではなかったのです。その不毛の土地に大きな川を通して、人々を移住させ、明治初期からの「大函館」を作り上げたのです。今日の発展を成し得た重要な役割を果たした川であるといっても過言ではありません。その功績は実に大きいものでありました。

図－1　函館の中央を通る願乗寺川（函館真景・明治15年）
（函館中央図書館蔵）

しかし、この川も明治10年を過ぎると、河口に多くの土砂が流出して函館港を埋めるようになってきました。そして更に、川の付近から毎年のように伝染病が発生し、多くの患者が出るようになったのです。この川を開削した初期の目的を達し終え、む

しろその被害を市民に与えるようになって来たのです。そのため、川の流れを新川にショートカットし、大森浜へと流すことにしたのです。飲料水は新たに上水道を敷設することとしたため、願乗寺川は廃川となり、埋め立てられてしまいました。

明治40年頃までは一部にその跡を残していたようですが、大火後の区画整理でその大部分を失い、また下水道の敷設などで埋め立てられ、その跡形さえも全く判らないようになってしまいました。今では「願乗寺川」という名前さえ知っている人はいなくなってしまったのではないでしょうか。

神山茂氏は、『願乗寺川の一生』という随筆で、次のように述べています。「生々－発展－衰滅の道を辿る移り変わりは、何も生物の世界に限ったことではない。川の一生においても同様である。この堀川も必要があればこそ、多くの費用と労力を払って、区民待望の中に完成されたのであったが、その使命を果たし終えると有害無益の存在となって、遂に埋め立てられてしまったのである。その寿命は僅か30余年に過ぎなかったが、函館におけるこの川の想い出は深い。」と述べています。

今はもう過去の歴史の中に埋もれてしまい、市民からすっかり忘れ去られてしまった「願乗寺川」ですが、この壮大な掘割を掘削した人々を偲び、埋め立てられるまでの顛末を綴って、願乗寺川の果たした役割を振り返ってみたいと思います。

2. 願乗寺川前夜

願乗寺川について語る前に、願乗寺川が作られる以前の亀田川とはどのような川であったのか、箱館の当時の飲み水はどのように確保されていたのか、確認してみることにしましょう。

（1）箱館の盛衰と亀田川

函館付近に和人が移り住んだ時期を正確に知ることは難しいことです。17世紀に成立した松前藩の『新羅之記録』では、享徳三（1454）年に津軽の豪族・安藤政季に従って武田信広（松前氏の始祖）や河野政通らが蝦夷地に渡来し、道南十二館を築いたといわれています。河野政通は当時、「宇須岸（うすけし）」と呼ばれた函館山の麓に館を築いたそうです。その大きさは、旧函館病院から元町公園に至る四方に土塁を築き、環濠を巡らしていました。館の形から、この付近を「箱館」と呼んだといいます。

道南十二館時代には、和人の度重なる暴挙にアイヌが何度も蜂起していました。長禄元（1457）年にコシャマインの乱が起き、「宇須岸館」は攻め落とされました。さらにその50年後の永正９（1512）年にショヤ・コウジの乱が再び起こり、この時には箱館の河野季通（政通の子）ら一族が敗れ、その後箱館は戦禍の痛手から立ち直ることは出来なかったといいます。箱館の住民は隣接地の亀田村に移り、以後百余年にわたり箱館の地は衰微し、亀田村が次第に発展していくこととなったそうです。

江戸時代に入り、幕藩体制が確立しつつあった慶長年間（1600年代初）に松前藩は亀田村に番所を設け、知内以東の和人地を管理支配しました。亀田村は当時、亀田川という大きな川に支えられて早くから農業が開け、漁業も盛んでありました。箱館が荒廃していた寛文９（1669）年には人家が200軒もあったといいます。

亀田川は横津岳連峰の袴腰岳（標高1,108m）に源を発し、その上流・中流は旧亀田市の赤川を通り、現在は函館市街地を貫流して大森浜から津軽海峡に注いでいる川です。しかし、幕末に願乗寺川が出来るまでは、下流側の流れは違っていました。その頃の「旧亀田川」は梁川町の交通公園の近くある鍛冶橋付近から亀田村に流れ込み、亀田八幡宮の森を通ってガス会社交差点付近から万代町辺りで函館湾に注いでいたといいます。この河口付近に架けられていた橋が、文化元(1804)年に架けられた有名な「万年橋」でした。明治初めの記録では長さ十三間（約23m）、幅二間（3.6m）の大橋であったといわれています。

写真―１　亀田川上流部（新中野ダム湖と袴腰岳）

図―2　万年橋（亀田川）の図（函館中央図書館蔵）

今日亀田川の流れを見ますと、誠に小さい流れでしかなくなっています。これは後年、赤川付近の亀田平野の灌漑用水に使用されたり、函館市民の上水道に利用されたりしたために、亀田川はその残余の流れしかなくなってしまったのです。これらが差し引かれずに、亀田平野を通って万年橋に流れていた当時の水量の多さは、どれ程であったか推察されるのではないでしょうか。

このような亀田川も、元禄以降は季節風と海流の関係からか川口に砂が堆積し、さらに上流からの土砂を流出させて川口は次第に閉塞されていきました。川の流れは延々と曲がりくねって、吐水を妨げて大雨になるとすぐに村内は溢水し、村人を苦しめました。元禄15（1702）年と16年の夏、蝦夷地に連続して暴風雨があり、亀田川が氾濫して番所や役宅、民家30戸が流され、畑は冠水して壊滅的な大打撃を受けたといいます。

それとともに、海は益々遠浅になって船の錨地を害い、船は次第に天然の良港である箱館の湊へ碇泊するようになってきました。亀田村の人達も一人去り二人去り箱館村へと移り、このため亀田村は次第に衰微していったそうです。そして寛保元（1741）年にはついに、亀田番所も箱館のほうに移っていってしまいました。

亀田川の切り替えはそれ以前からも何度か計画されていたようですが、当時としては何といっても民間の力では一大事業となってしまうため、中々着工に踏み切れませんでした。嘉永・安政の頃（19世紀中頃）になると、箱館の都市化が爆発的に進み、市街地が函館山の麓から次第に東北部に延びて来ました。そして、この方面の人々の飲料水確保が大きな問題となってきたのです。

（2）箱館の水事情

函館山は元々海中にあった一つの島であったことは、先に述べました。風と潮流で陸地側と砂洲で繋がり、細い地峡部を作り上げたのです。そのため、この扇状の細長い土地には飲料水に適する良質の水が湧出する井戸は皆無でありました。函館山の麓でも、井戸を掘っても中々水は湧いてきませんでした。よほど深く掘らなければなりませんが、それにしても岩石が多くて当時の井戸掘り技術では困難を極めました。地峡部では、地下２～３ｍも掘り下げると水は豊富に湧き出しますが、濁水で塩分が濃く悪臭も漂うという水で、とても飲み水にはならなかったそうです。

19世紀初頭、それまで松前藩の統治下にあった箱館が幕府直轄地となり名実ともに蝦夷地の中心地になった頃から、爆発的なテンポで都市化が進んでいきました。このような時に、住民は飲料水をどう確保していったのでしょうか。結局庶民は、劣悪な地下水を求めて地峡部に井戸を掘るしかなかったようです。『風雪の一世紀、函館水道創設事業史料』によりますと、記録は少し新しいのですが函館区に水道が敷設される直前の明治11（1878）年の調査では、区内にあった井戸数は426か所であり、その対象人口は25,688人であったといいます。つまり、平均一井あたり60人を賄っていた事になります。

その中で、山麓付近の上町通りでは、平均して12mから15mほどの深さで良質の湧水が出たそうです。最も深い井戸では、44mにも達したといいますが、しかしこの場合でも水量は豊富ではなかったようです。一方、地峡部の下町通りでは浅いもので２ｍ～３ｍ程度の深さでしたが、海面との標高差が少なく良質の地下水は望むべくもありませんでした。多くは海水の影響が強く硬水でした。人家密集地ではたちまち渇水に陥り、生活環境は悪く長屋の下水や共同便所からの汚水の侵入も避けられなかったということでした。

19世紀初頭の文化時代における著名な井戸・水源として知られているいくつかの代表的なものを次に列挙しておきます。

（3）富山（とみやま）の泉

享和２（1802）年、幕府は基坂の上に箱館奉行所を設置しました。そしてその邸内に井戸を計画しましたが、地中に岩石が多く大変困難を極めて掘り上げまし

た。しかし水量は少なく、役所で利用するには不十分であったそうです。

そこで箱館奉行は、調役並の富山元十郎という人に、函館山の各所を検分させてついに海抜180m程の山腹に清泉を発見しました。これを樋で奉行所に引き入れ、付近の住民にも利用させたといいます。この功績を後世に伝えるため文化３（1806）年、箱館奉行の羽太正養はこれを「富山の泉」と名付け、碑を建てさせたということです。

図―３　富山泉碑・拓本の一部（写）

「水元」の水量は、明治12（1879）年の「クロフォード報告」（『函館水道創設事業史料』による。）によりますと、１日（24時間）に20～30㎥程度であったそうです。この程度の水量では、放置すれば山麓を流れ下り大部分は途中の地中にしみ込んでしまうものでしょう。この水源を堰き止めて、木樋で奉行所や官舎に給水する施設を設置したのでした。

神山茂氏の『願乗寺川の一生』によると、この泉の湧出した場所を「水元」と称し、後に函館山の一地名になったのだといいます。水元は護国神社付近の函館山登山道途中にあったということですので、実際に函館山に登って確認してみました。登山道３合目付近の側溝わきに湧水個所を発見しましたが、実際に「水元」であったという詳細な場所は特定出来ず仕舞いでした。松浦武四郎の『蝦夷日誌』によると、松前藩復領の際にその泉は埋められ、碑は市中の蔵の踏石になってしまったそうです。後年発見された碑文の拓本は北海道開拓記念館に収められており、そのコピーを持つ近江幸雄先生によると、拓本の大きさは、縦125㎝、横52㎝であったといいます。

（４）かなえの泉

文化３（1806）年の冬10月、弁天町の河岸市店から出火して350戸ほどが焼失するという大火災が起きました。幕府の勘定奉行で蝦夷地御用掛を兼務していた石川忠房は、早速この大火の見舞金として十両の大金を江戸から送付してきました。箱館奉行の戸川筑前守と羽太安芸守は協議して、自分たちの元手もこれに加えて、翌文化４年の春に大町の一角に井戸を掘削しました。井戸は地中の巨岩を見事掘り抜いて清水が湧き出しました。この水は付近数十戸の飲用水と非常時のための防火用水にしました。

この井戸は、石川・戸川・羽太の三人が協力して出来上がったものであり、鼎（かなえ）の足が三本で立っていることに例えて「かなえの泉」と名付けられたといわれます。

（５）高田屋の井戸

文化３年の大火で西部地区の大部分が焦土となり、防火体制の不備を憂いていた人物がもう一人いました。豪商といわれた高田屋嘉兵衛です。彼はこの大火で自らの店舗を焼失したにもかかわらず、罹災者を救援しました。翌年には自費で大阪から井戸掘り職人を雇い、市内の各所に井戸を掘らせました。

図―４　高田屋嘉兵衛肖像
（函館中央図書館蔵）

そして、各町内会に消防組織の整備拡充を図り、鳶口（とびぐち）・刺股（さすまた）・手桶・龍吐水（りゅうとすい）などの消防用具を贈りました。今から考えるとおもちゃのようなものばかりですが、当時の箱館には最新の消火器だっただろうと思われます。

これらの井戸は、市内に７か所ほど掘り抜いたようですが、この井戸を総称して「高田屋の井戸」といっています。特に地蔵町（当時）の異国橋付近（十字街電停付近、「栄国橋」・「永国橋」ともいう。当時の箱館人にはどちらも「エゴグバス」と発音されたのではないでしょうか。）の井戸に良質で豊富な水が湧き出たと

いわれています。

当時の箱館では、良質の飲料水を得るのに大変な苦労がありました。特に異国橋より東北側の地峡部では、このために街の発展が著しく遅れることとなったのです。安政以降の箱館は開港場として人口が急激に増加して、市街が次第に東北側へと拡がってきました。そのため、どうしてもこの方面に飲料水を供給する必要性が出てきたのです。そこで願乗寺の僧法恵が川を掘削するという事業を考え、土木事業者である松川弁之助が工事を施工し、完成させたのです。この事業の顛末は後述することとします。

（6）その他の古井戸と水売り

箱館の古井戸の記録としては、寛保元（1741）年に松前藩が亀田番所を箱館に移し、宝暦２（1752）年にこの地に井戸を掘ったとする記録が残っています。また『蝦夷島奇観』には、同年８月大町の榊家で井戸を掘ったところ、北朝時代（14世紀中頃）の「貞治の碑」が出てきたと記されています。

前幕領時代（1799～1820年）に入ると、箱館奉行は商工業者から徴収する諸税の中に「山上町堀井戸冥加」を定めていたといいます。奉行所が住民のために井戸を掘っていた事が窺われます。安政元（1854）年のペリー提督の随行記に、市内の様子があり、防火用具や井戸について触れられていました。火災の多かった往時の箱館が偲ばれます。

箱館の街は堀井戸、湧水などの水を飲用としていましたが、いつも水不足に悩まされていました。願乗寺川が通る以前は、箱館沖から対岸の亀田川河口の万年橋付近に船を出して、水汲み商売をしていたといいます。願乗寺川が通った明治以後でも人口の増加と川の汚染が進み、飲料水を担いで報酬を得る「水汲み渡世」という商売がありました。水売りは、手桶二つを天秤棒で担いで売り歩き、ひしゃく一杯が３銭であったそうです。

3. 願乗寺川の計画と施工

（1）願乗寺川の概要

「願乗寺川」とは、願乗寺の僧法恵（ほうけい）が計画した川であり、願乗寺の名前からその川の呼称としたものです。また、人工的に掘った川であったことから「堀川」と呼んだりもしていました。一説には、京都の堀川に因

図－５　願乗寺川の付け替えルート

んで西本願寺・本山から頂いた名前だともいわれています。明治に入ってから、僧の法恵に本山から「堀川」という姓を賜って「堀川乗経（ほりかわじょうきょう）」と名乗りました（以後、僧「法恵」は「堀川乗経」と呼びます）。

願乗寺川とは、どのようなルートで流れていたのでしょうか。その概要を述べることとします。亀田川は赤川の下流部をいい、その昔は梁川町の交通公園付近の鍛冶橋から亀田八幡宮の森を通って万年橋から海に注いでいることはすでに述べました。この亀田川を鍛冶橋付近から新しく付け替えて川を掘り、中の橋方面に分水して高砂通りを大縄町・若松町・大手町を経て、末広町銀座通りにあった高田屋の掘割という運河に入れたのが願乗寺川だったのです。

その頃にあっては珍しい民営の、それも寺院が進めた一大土木プロジェクトでありました。完成後箱館奉行所はこれまでの亀田川を「古亀田川」、新しく掘った川を「新亀田川」と呼ぶように布達を出しましたが、この名称は一般には余り普及せず願乗寺の和尚さんが作った「願乗寺川」という呼び名が圧倒的に支持されたそうです。

（2）堀川乗経と浄土真宗西本願寺派

堀川乗経（じょうきょう）という僧は、どのような経歴の持ち主であったのでしょうか。また、彼が所属していた浄土真宗西本願寺派は蝦夷地ではどのような立場であったのでしょうか。彼の活動の背景を見てみることにしましょう。

彼は初め、「法恵（ほうけい）」と名乗っていました。陸奥国北郡（青森県下北郡）川内村の願乗寺住職の次男として生ま

写真―2　願乗寺、堀川乗経師
（函館中央図書館蔵）

れました。８歳で父を失い、長じて諸国を遍歴し修業に励んだといいます。天保12(1841) 年、18歳で蝦夷地に渡り箱館・小樽の様子を調査したといわれます。

当時の松前藩における仏教界では、彼の所属する真宗西本願寺派だけが頑なに禁じられていたのです。松前藩の中では布教することも、寺院を建てることも一切禁止されていたのでした。このような不条理な宗派弾圧は、当時ではおそらく松前藩だけであったと思われます。その理由は、およそ次のようなことだといわれていました。

蝦夷地を統一した武田信広（後に蠣崎）を始祖として、第四代蠣崎季広（すえひろ）までは仏教の中でも真言宗と深い関係を持っていたといいます。浄土真宗とつながりを持つようになったのは、松前藩として独立した慶広（よしひろ）の頃でした。松前に専念寺という浄土真宗の寺がありましたが、江戸時代の当初には浄土真宗はまだ東西に分かれていませんでした。

あるとき京都本願寺と専念寺に何らかのトラブルが起こり、藩主慶広が調停したという因縁から専念寺と松前藩は深い関係で結ばれるようになったそうです。のちにこの専念寺は東本願寺派（大谷派）に所属することとなりましたが、その際西本願寺派が松前藩に末寺の設立を幕府に願い出ても、専念寺は松前藩と固く結びついて「領内での門徒の儀は往古より東本願寺の一派」で行うことを理由に断固拒否して来たのだそうです。このような西本願寺派に対する弾圧は幕末まで続き、乗経が蝦夷地に渡来した頃もまだ続いていたのです。

僧侶としての修業を諸国で積んでいた乗経は、蝦夷地でのこうした弾圧に対して、江戸築地本願寺掛所（かかりどころ）で蝦夷地に寺院を建てるべく進言をし、京都本山に意見書を提出しました。本山ではこれを聴許し、彼に蝦夷地での開経・布教を命じたのです。安政３（1856）年、乗経33歳の時に兄秀道の跡をついで郷里川内村願乗寺の７代目住職となりました。そして同じ年に彼は再び蝦夷地に渡り、小樽に願乗寺出張所を建てました。続いて函館に移り、豪商国領平七らと図り、地蔵町に１万坪を借用して願乗寺休泊所を建設したのです。

これが蝦夷地における西本願寺派の始まりでありました。この頃の蝦夷地は、幕府が二度目の直轄地としていた時であったため、松前藩は全く力を失っていたのです。蝦夷地ではこうした幕府権力に支えられて新寺院が寺勢を伸張していた時期でもありました。このことを知り、松前城下では東本願寺派のみならず、全寺院が驚愕したそうです。

西本願寺派僧侶の堀川乗経が箱館に願乗寺休泊所を作り、亀田川の工事に着手したのです。これまで懸命に西本願寺の蝦夷地進出を阻止し続けてきた、松前城下の東本願寺派の独占体制がにべもなく打ち破られたのです。幕府権力を拠り所にしたこうした動きは、城下の全寺院に計り知れない大きな衝撃を与えた事だったのでしょう。

（３）堀川乗経の計画

長く続いた松前藩の西本願寺派への弾圧政策は、乗経の熱意で終わることとなりましたが、乗経の目的はこれで完全に果たされたわけではありませんでした。寺院を建立し布教を始めることは、いわば目標の第一歩であり、第二・第三の仕事が待ち受けていたのです。

西本願寺派本山では、かつて乗経に先立って蝦夷地に開墾という名目で、箱館近郊の濁川（旧上磯町清川）に入真房という僧と共に20戸余りの信者を入植させたことがあります。しかしその僧が途中で病死したために、開拓・布教の目的は達せられませんでした。乗経は、まず入真房が果たせなかったこの地の開拓を手掛けることとしました。安政５（1858）年に但馬・能登・加賀・越前などから信者370人を募って、濁川の開拓地に入植させました。そしてこの地に心の安寧を図るた

写真―3　旧上磯町清川地区

めの「願乗寺休泊所」を建てました。後にこの施設は江差に移されて、今の「本願寺派江差別院」となったそうです。

こうした活動を行いつつ、乗経は亀田川の河川工事にも着手したのです。亀田川の河口が土砂で埋まり、毎年のように川水の氾濫が起って付近の農民が大いに困窮していました。そのため、鍛冶橋辺りで亀田川を堰き止めて、他に流してやることを考えたのでした。一つはこの付近の農民たちを水害から救い、そしてもう一つは川の流れを箱館の地峡部に導くことによって箱館の街に飲料水が確保出来ると考えたのです。

地蔵町に建設した願乗寺（現・本願寺函館別院）付近の砂漠地もやがては市街地となり得るだろうと檀家に諮り、本山に上申して、箱館奉行所の許可を得て、安政6（1859）年5月に着手しました。これ程の大工事をわずか7か月という驚異的なスピードで完成させたのは、莫大な工事資金の調達がスムーズに行われたことと、蝦夷地御用取扱をしていた土木技術者松川弁之助の協力があったからでありました。工事資金の調達は、本山からの補助と寄付金などで賄われましたが、そのほとんどが乗経の努力によって集められたものだということです。

写真―4　地蔵町建設された願乗寺
（函館中央図書館蔵）

乗経の計画した河川工事のおかげで箱館は大きく開けていくようになりました。そして堀川に沿って人家が密集しはじめました。このように箱館の繁栄は、実に堀川の開削によるところが大きかったのです。一方、本業の願乗寺の方は安政7（1860）年に休泊所から「本願寺掛所願乗寺」と改められました。慶応元（1865）年に幕府から願乗寺に約4ｈａの土地が与えられました。乗経はその土地に住居を建てて転入者の便を図ったり、「救貧院」という施設を作って身寄りを失った困窮者を収容し、また後の箱館戦争で傷ついた人を介護したといいます。

写真―5　函港新渠碑

万延元（1860）年に建てられたという「函港新渠碑」は、今も本願寺函館別院（旧・願乗寺）に残っています。平成25年に函館別院が新しく改修され、その境内の一角に「堀川乗経師顕彰碑」とともに建てられています。函港新渠碑には堀川乗経が蝦夷地で布教を始め、願乗寺川を掘削するに至った経緯などが書いてあります。これは幕臣の鈴木尚太郎重尚（雅号・茶渓）が揮毫したもので、文体は漢詩文で仏教用語も多く、私のような素人にはなかなか分かりにくい文章でした。この碑は何度かの火災に遭っていますが、奇跡的に破損せずに今日なお函館別院の境内に残っており、願乗寺川の功績を物語っています。

図―5　松川弁之助の肖像（函館中央図書館蔵）

（4）松川弁之助の協力

松川弁之助は、越後国蒲原郡井栗村（現、新潟県三条市井栗）出身の人です。蝦夷地の開拓と北方の防護とを志して、安政3（1856）年に箱館に渡ってきました。そして幕府の蝦夷地御用取扱を命ぜられ、数々の土木事業を成し遂げてきました。

主な功績としては、石川郷（現、石川町・美原地区）に農夫を入れて幕府のお手作場を開いたり、谷地頭に土地1万5千坪を請い受け、畑を開墾して奉行所に献上しました。その後は、備前の石工棟梁喜三郎と共に五稜郭や弁天台場の築造を手掛け、豊川町の埋め立て工事を行い、その手腕を遺憾なく発揮したそうです。若松町から中の橋を経由して五稜郭に至る「松川街道」を私費で築造したのも彼でした。松川街道は、今では大きな道路に囲まれて目立たなくなりましたが、地図上で確認すると若松町から五稜郭に一直線に延びており、往時を偲ばせています。松川弁之助は、当時の箱館の土木事業家として第一級の実力者であり、まさに箱館の街を作った人といっても過言ではありません。

松川弁之助は、性格的にも中々立派な人物であったそうです。そしてこの人もまた、箱館の飲料水を得るためには亀田川の水を引いて来なければならないと考えていました。たまたま願乗寺の僧・堀川乗経と会い、亀田川を付け替える話で意気投合しました。そして官の協賛を得て、資金は京都本願寺に蝦夷地の開教を目的に支出させ、新渠を開削することとしたのです。土木工事に何の経験も無い乗経が独力でこうした大事業を成し遂げられるはずもなく、しかも7ヶ月という短い期間に完成させるということは、出来るはずもありませんでした。

松川弁之助という強力な技術者が協力・参画し、その上幕府の支持があったればこそ、この大事業も完成したのです。『松川弁之助君事蹟考』という文献から願乗寺川に関する部分を紹介します。

「願乗寺の前にある亀田川付け替えの新川（願乗寺川）は、弁之助の発案により図面を作り、幕府に建言して採用された。これを願乗寺の法恵（堀川乗経）に相談したところ、同寺でこの事業の一切を引き受けてくれた。今（大正初め頃）より遥かに安い金額であったが、それでも金3,500円（両）を費やして、新川の掘割や入口部の堰石、波戸（波止場）、8ヶ所の橋などを造り終えた。この賞として幕府からは、墓所の他12,118坪の土地を賜った。この流水の便によって、西川町・東川町・蔵前町・宝町・若松町・一本木町・海岸町などの新町に軒が並び建った。そしてその余潤は近傍にも波及し、地蔵町の場末や龍神町・鶴岡町あたりは、今は人口密集地となっている。（　）内は筆者。」

（5）願乗寺川の構造

願乗寺川の築造時の構造については、幕末時代の工事でありしかも民間工事ということもあってか、詳しい史資料を見つけることが出来ませんでした。そのため、参考文献などの記述から想像を膨らませて推測するしかありませんでした。本項は、その程度の精度であることをお含みおき下さい。

まずルートですが、これはすでに述べたとおり願乗寺川とは亀田川に作った人工的な下流部をいい、その

写真―5　鍛冶橋の下流部（旧願乗寺川）

始点は梁川町交通公園付近の「鍛冶橋」です。終点は十字街銀座通りにあった高田屋掘割の運河まででした。川の流れはほぼ直線形となっていました。

水路の延長については、文献によって差がありよく分からない所があります。そこで筆者が地図に定規を当てて凡その距離を測定してみました(『都市地図・函館市 1/15,000、昭文社』による)。

(a) 鍛冶橋～中の橋　1,025m
(b) 中の橋～銀座通り運河　2,875m
(c) 銀座通り運河～河口　550m
(d) 中の橋～大森浜（新川）　1,700m

つまり、願乗寺川が海に到達するまでの（a）～（c）は4,450mであり、約4.5kmでありました。

川幅についてはどうだったのでしょうか。『新編・函館物語』では、川底幅5.4mとし、『水道百年史』では開削当初は3間(5.5m)であったとしています。『願乗寺川の一生』では『北海道庁事業功程報告書（明治20年)』の記事として、埋め戻し時に恵比須町付近の掘割の幅は平均7間（12.7m）余りであったとしています。つまり願乗寺川の川底幅は概ね5.5m程度ですが、願乗寺付近から掘割の運河にかけては舟運もあり12.7m程に拡幅していたものと思われます。

川の深さについても検討してみましょう。鍛冶橋から中の橋にかけての願乗寺川は、新川開削工事の際に拡幅工事が行われ川幅が広くなっています。しかし、川の深さは基本的に変わっていないと思われます。この新川の工事で高さ7尺（2.1m）から9尺（2.7m）の石垣を築いたとしています。石垣は今も残っていますが、川底から堤の上までとなっており高さは当時の倍程で、5m～6mはありそうです。河口付近の運河

図―6　願乗寺川の八橋（当初）

では、前述の「埋め戻し時の記事」から深さ9尺6寸(2.9m）であったとしています。

願乗寺川掘削の工事金額についても、延長と同様にいくつかに分かれています。前述の『松川弁之助君事蹟考』では松川弁之助の請負金額は3,500円（両）でしたが、『函館市史・通説編第1巻P648』では7,300余両、『函館市誌P909』では5,330両、『同P1103、P1172』では7,300余両となっています。多分考えられるのは、新川の掘削費が含まれたり、中の端から上流側の改修費が含まれたり、全体工事費の前提条件が異なっているためと思われます。

かつてこの川は願乗寺（現・本願寺函館別院）の近くまでは、素掘りの川でした。大雨になると土手が崩壊して氾濫を引起し、その度に付近の住民に紛争の種を作ったといいます。また、上流側と下流側とで水争いや法面の補修で紛争も絶えなかったそうです。

最後に願乗寺川に架かっていた八橋について述べておきます。万延元（1860）年11月23日の梨本弥五郎等の触書に、当時の掘割橋に八橋の名前がありました。この八橋とは上流側から亀田橋、湯ノ川橋、柳橋、中ノ橋（当時)、下湯ノ川橋、御蔵橋、恵比須橋、永国橋(異国橋）でした。亀田橋とは現白鳥橋のあたり、亀田村から五稜郭に向かう重要な道路に架かります。湯ノ川橋とは現宮前橋のあたり、亀田村から湯の川村方面に向かう道路に架かります。柳橋とは現新生橋のあたり、亀田村から千代ヶ岱陣屋に向かう道路に架かります。中ノ橋は、箱館方面から五稜郭に向かう陣屋通りに向かいます。現在は高砂通りに架かっていますが、当時は松川街道に架かっていました。下湯ノ川橋とは当時地蔵町地蔵堂脇から下湯ノ川村に向かう道路に架かります。御蔵橋は現東川児童館のあたりに架かります。恵比須橋および永国橋（異国橋）は、銀座通りの掘割に架かっており、本来は願乗寺川の橋ではありません。その後、明治9年の古地図（冨原章氏『箱館から函館へ』）によると街の発展と共に、駒止橋、千鳥橋、願乗寺橋、宝橋など、数多くの橋が架けられていったようであります。

（6）願乗寺川の功績

願乗寺（本願寺函館別院）が次第に信徒を増やし布教の実績を上げてくると同時に、箱館の街もこの願乗寺川のおかげでやがて人家が増えるようになってきま

写真―6　明治初期の願乗寺川
（函館中央図書館蔵）

した。元来、恵比須町（現・末広町）や蓬莱町（現・宝来町）でさえもその東北側は、無名の荒れた砂地でありました。それがこの川によって地峡部一帯に家並が出来るようになり、徐々に街の形が整ってきたのです。

はじめのうちはきれいな水が絶え間なく流れていました。今の東雲町の消防本部のあたりには、米を脱穀する水車がのどかな音を立てて回っていたといいます。もちろん飲料水には差し支えありませんでした。

また『函館区史』では「この堀が出来て三つの利便を与えるようになった。その第一は、飲料水を沿岸の住民に与えたことである。第二は、沿岸湿地の汚水を排除して土地を乾燥させたので、住民の居住に適するようになったことである。第三は、小舟がこの堀をさかのぼって、運輸の便を助けたことである」と述べています。

しかしこの川の両岸に次第に人家が増えると、どうしても塵芥や汚物が川の水を汚し、日中の飲料水汲み取りが次第に出来なくなり、夜明けを待って一日分の用水をため置くようになってきました。さらに人口が増えてくると、下水道の水が混入したり、路面からの汚水が流入したり、ゴミが投入されたりして、もはや飲料水として使用出来ないありさまとなってきました。これが明治14～15年頃の函館開拓時代の終わりごろの状況でありました。

（7）願乗寺川の害

この川の付近に人家が集まり新しい町が出来て、それが東北側へと徐々に延びるようになると、川がどうしても汚れるようになってきました。自家や共同の井戸を掘って間に合わせて来ていましたが、それでも不便が多かったようです。この頃には掘り抜き井戸の掘削技術も相当に進歩してきており、昔に比べるとずいぶん変わってきているのですが、それでもどこを掘っても良い水が出るとは限りませんでした。人々は、比較的良い水の湧き出る共同井戸に集まって水を汲むようになっていったのです。

この頃から願乗寺川には、困った問題がいくつか起こるようになってきました。一つは、この川の泥土や塵芥が港内に流れて港を埋めていったのでした。またもう一つの問題は、この川が伝染病を媒介して多くの患者を発生させ、毎年多数の死亡事故を発生させるようになったのです。

本州との交通が次第に増加するようになって、コレラなどの伝染病が本州航路の船によってもたらされるようになってきたのです。明治10（1877）年以降は、毎年のように東南アジア方面から長崎などに入りこみ、この地を基点として各地に流行していったのです。明治19（1886）年7月、入港した外国船からコレラが伝染し、11月まで猛威をふるい被患者1,224人を出し、842人が死亡するという大惨事が起こりました。とくに願乗寺川流域から多数の患者が発生したのです。しかも患者の発生が最も多かったのは、東川町・西川町方面でした。当時のこの地域は特に貧しい人々が多く、不潔な地域でもあったそうです。願乗寺川の下流域ではもはや飲料水にしろ、雑用水にしろ、使えるような状態ではなくなって、不衛生極まりない生活状態になっていったのです。

写真―7　明治22年ころの函館市街（部分）（函館中央図書館蔵）

こうした問題を解決するためには、上水道の完備と願乗寺川の流れを大森浜に付け替える以外に方法はありませんでした。函館区は開拓使（後の北海道庁）に明治６（1873）年頃から何度も上水道の敷設を要望していましたが、実際に水道工事が着工されたのは明治21（1888）年に入ってからでした。

3. 願乗寺川の埋め立て

（1）新川への切り替えと仮水道の敷設

願乗寺川の流れを止め、川を廃止した原因は前項で述べたとおりです。しかし、川を埋め立てる直接の原因となったのは、亀田川の末流である願乗寺川を中の橋から新川に分岐させて大森浜に付け替えた結果、願乗寺川は全く水が流れないドブ川になってしまったからです。

この新川への切り替えは、明治20（1887）年に工事を始めて完成したのが同21年末でした。中の橋から上流側の670間（1,220m）の拡張工事と中の橋から大森浜への新たに掘削する910間（1,650m）、総延長1580間（2,870m）で、高さ７尺(2.1m）から９尺(2.7m）の石垣を築いた構造の工事が行われました。

この工事が始まってから上水道が完成するまでの間、願乗寺川流域の住民への給水はどうなっていたのでしょうか。亀田川分水口（梁川町鍛冶橋付近）から願乗寺川の川岸に沿って東川町まで、檜の箱樋による仮水道1750間（3,182m）を布設したのです。これによって高砂町・音羽町・東川町・西川町・若松町・鶴岡町・真砂町・地蔵町・汐止町・宝町などに50ヶ所余りの桝を設置し、既にある共同井戸と連絡させて通水したのです。これらの井戸にはいずれも清水が満ち溢れ、付近住民への利便が図られました。

このようにして願乗寺川は、その上流の中の橋で新川に切り替えられました。そして住民には仮水道を設置することによって浄水が供給されたので、飲料水に事欠くことはありませんでした。しかし流れが止まったその川跡は、誠に不衛生なドブ川と化してしまったのです。早速にこれを埋め立てるとの議論が起こり、着手することとなったのです。

（2）埋め立て工事の概要

最初に埋め立てられたのは、願乗寺川の末流を形成していた恵比須町と宝町の間（現銀座通り）にある掘割であった。この掘割は享和元（1801）年に築島と共に設けられたもので「高田屋通りの掘割」と呼ばれ箱館では古いものでした。埋め立て工事は明治20(1888)年11月から始められました。『明治20年度北海道庁事業功程報告書』にその様子が次のとおり報告されていました。

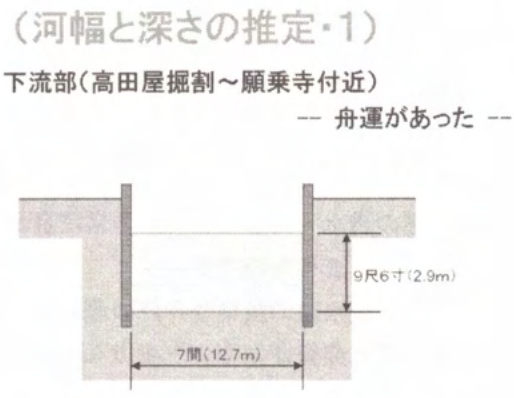
「函館港恵比須町と宝町間に在る幅平均七間（12.7m）余、延長百五十間（273m）、深さ九尺六寸（2.9m）の大溝渠は、逐年埋没阻滞し、衛生上の患害を為すに至る。而して今此の溝渠をして、浚疎流通せしむるの必要を見ず。故に之を埋填し以て道路と為さんとす。二十年十一月工を起こし未だ全く竣（おわ）らず。其費豫算金二千八百八十円なり。」

（（　）内は筆者）

この工事は、翌明治21（1888）年の春に完成しました。そして恵比須町の家屋14棟と土蔵１棟を移転させ、旧来の曲がりくねった道をまっすぐにして、今日のような道幅の「銀座通り」に拡張されたのです。

次にいよいよ願乗寺川の本筋の埋め立てです。恵比須町から西川町を通り、高砂町に至る643間（1,170m）、幅６間（11.0m）を埋め立てることとしました。これはおおよその位置感覚として、現在の銀座通り交差点から高砂通りで市役所前のあたりまでのようでした。しかしこの工事は、全幅を一様に埋め立てたのではなく、１間半（2.7m）程を下水溝として残し、雨水などを港内に流出させることとしたのです。

これらを埋め立てるための土砂は、その頃上水道敷設工事も同時に行っていたことから、元町配水池工事で発生した残土を利用することとしました。願乗寺川の埋め立て工事が完成したのは明治22（1889）年３月でした。

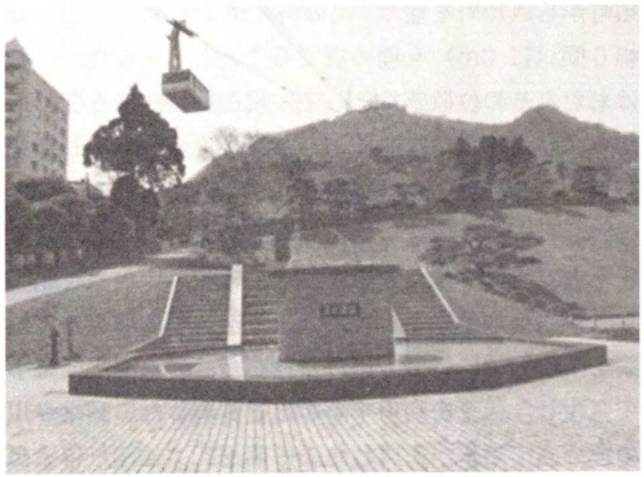


図－７　願乗寺川下流部の断面（推定）

この埋め立てにより、あちこちに有効な用地が拡がり、道路の拡張や住宅地を生み出しました。ユニークだったのは、西川町蔵前に遊園地を設けたことです。この遊園地の外側には露店市が開設し、野菜や魚類を販売する魚菜市場へと発展していったようです。遊園地は昼夜共に露店が出るようになり、やがて夜の盛り場にもなっていったといいます。

（3）上水道工事と仮水道の撤去

箱館の街に水道の必要性を主張したのは、後に函館区長となる常野正義でした。日本で初めて水道が敷設されたのは、明治20（1887）年の横浜でした。函館に敷設されたのは二番目で、横浜の敷設からわずか2年後の事でした。計画はもっと早い時期から行っており、明治6（1873）年および11（1878）年に開拓使に上申し、その後何度か調査活動も行っていました。この頃になると川の汚濁が進み、たび重なる火災や伝染病の蔓延など、願乗寺川の限界が見え始めた頃でもありました。



写真―8　上水道・元町配水場

明治21（1888）年6月から着工していた上水道敷設工事は、翌明治22年9月に工事が竣工し、同月20日に疏水式を挙行しました。そこで暫定的に設けていた仮水道給水個所については、当初はそのままにしていましたが上水道の通水・給水の状況が非常に良かったため、埋め戻してしまったのです。

しかし、この仮水道の放棄や井戸の埋め戻しは早計でした。その後も頻繁に発生した火災への防火用水や、道路のホコリよけのための路面散水などへの用水確保の必要性が生じたのです。後年の大正時代に入ってから、防火用水の確保として仮水道を再び利用したといいます。

4. その後の願乗寺川

神山茂氏の著作集に「願乗寺川と新川」という短い随筆がありました。明治26（1893）年生まれの神山氏が10歳の頃の思い出であるとしていることから、明治36（1903）年頃の情景であろうと思われます。この随筆から、その当時の模様を再現してみることにしましょう。

神山氏は東川町に生まれています。その当時、東川町から東北側の方は全くの野原だったそうです。春になって雪が消えると緑の草が萌え出て、白や赤のクローバーの花が咲き大きな熊蜂が蜜を求めて飛んでいたそうです。牛はどこからか牛飼いに連れられて、この野原で草を食べていたというのんびりとした風景が描かれていました。

昔、願乗寺川は中の橋から一直線に高砂通りの市役所前を通り、銀座通り交差点で大掘割に落ちていた川でした。この上水路は明治20年頃から埋め立てられて廃止された川になっていましたが、それでもまだ高砂学校（現市役所付近）から上流側は9尺（2.7m）から2間（3.6m）位の大溝が残っていました。人家からの汚水が流れ込まなかったから水は濁ってはいましたが汚くはありませんでした。枯れ残ったヨシなどが生え、道路側は掘り放しでしたが、土は崩れてきませんでした。しかし、反対側の木の土留めはすでに腐っていました。

子供時代の氏は、よくこの溝の中に入って小鮒やカニをすくってはワイワイ騒いで、夕方には何匹かの鮒をビンに入れて家に持って帰ったといいます。時々、中の橋から東川橋の間にも遊びに出かけたそうです。東川橋というのは、今日の電車通りと新川が交差する昭和橋の事で、この当時はまだ木橋でありました。この二つの橋の間には、両側の土堤下に緑の濃い小松林が続き、所々に桜の木が植えられていたといいます。

川の水は今日のように汚濁してはいなかったし、川床も至極きれいであった。時々街から小学生が遠足に来ては、一日この土堤で遊んでいったそうです。人家を離れているこの辺は、現在では想像できない程に静かな場所であったようです。

この話は、願乗寺川が埋め立てられて15年程した頃

の明治末年頃の風景です。その頃の願乗寺川流域の様子が良く分かります。願乗寺川は僅かに下水溝として生き残っていたのでした。願乗寺川が完全に埋め立てられて現在の高砂通りに近い形になったのは、さらに30年程後の昭和９（1934）年の大火の後に区画整理が行われてからの事だそうです。

5. おわりに

願乗寺川にまつわる物語はこれまで縷々述べてきました。幕末から明治にかけて、時代の要請に応えてきました。しかし本来の使命を果たし終えると無用の長物となり、むしろ社会に害を与えるようになって最終的には埋め立てられてしまいました。

写真―９　現在の高砂通り（旧願乗寺川）

函館の街はその後、何度も繰り返し大きな火災に遭遇しました。そして旧願乗寺川流域はその度に、区画整理や道路整備が行われてきました。街も当時の様子を想像することさえ出来ない程に変わってきました。今ではもう、その跡形さえも全く分からなくなってしまいました。

これも時の流れで仕方がないのでしょうが、この願乗寺川が今日の函館の街を発展させた大きなきっかけであったことを覚えておいて欲しいと思うのです。願乗寺川を作ろうとして心血を注いできた、僧の堀川乗経や松川弁之助といった人たちの熱い情熱の物語を忘れないで欲しいと思う次第です。

松川弁之助は、明治９年に郷里の新潟において75歳で亡くなりました。堀川乗経は明治11年に55歳という若さで亡くなっています。二人とも願乗寺川の最後の姿を見ずに済んだのは、せめてもの幸せだったのかもしれません。　（了）

【参考文献】

(1) 『富山泉碑』、近江幸雄、道史協支部交流会報・北の青嵐43号、平成８年８月１日号。

(2) 『歴史－はこだて人物散歩・堀川乗経』、近江幸雄、北海道新聞記事、平成11年12月27日。

(3) 『道南不思議夜話（旧亀田川の河口はどこか）』、近江幸雄、北海道新聞記事、平成21年12月27日。

(4) 『道南不思議夜話（「願乗寺川」開削の理由）』、近江幸雄、北海道新聞記事、平成21年２月８日。

(5) 『贈従五位　松川弁之助君事蹟考』、風間正太郎、松川藤陰、大正５年９月。

(6) 『道程（みちのり）－上磯町史写真集－』、上磯町、第一印刷、昭和57年３月。

(7) 『願乗寺川の一生』、神山茂、校正原稿形態、出版社・出版年不詳、函館中央図書館蔵。

(8) 『神山茂著作集・第２集、（願乗寺川と新川）』、神山茂郎、神山茂著作集刊行会、平成15年12月。

(9) 『北海道仏教史の研究』、佐々木馨、北海道大学図書刊行会、2004年２月。

(10) 『函館市誌』、佐藤勘三郎、函館日日新聞社、昭和10年12月。

(11) 『箱館から函館へ　－函館古地図再現－』、冨原章、函館文化会刊、平成10年２月。

(12) 『風雪の一世紀、函館水道創設事業史料』、冨原章、長門出版社、平成２年６月。

(13) 『箱館はじめて物語』、中尾仁彦、長門出版社、2010年12月。

(14) 『函館市史・通説編第１巻』、函館市、第一印刷、昭和55年３月。

(15) 『函館市水道百年史』、函館市水道局、第一法規出版、平成元年９月。

(16) 『生きている百年』、北海道新聞記事、昭和35年７月31日版。

(17) 『はこだて歴史散歩』、北海道新聞社、昭和57年５月。

(18) 『北海道開拓功労者関係史料収録（下巻）』、北海道総務部行政史料室、昭和47年３月。

(19) 『開拓につくした人々・１　－えぞ地の開拓－』、北海道総務部文書課、小宮山量平、理論社、1966年１月。

(20) 『新編・函館物語』、元木省吾、幻洋社、昭和62年７月。

平成25年度の主な事業（報告）

1．「友の会通信」・「友の会会報」の発行

(1) 友の会通信　第37号（平成25年11月30日）、第38号（平成26年１月31日）

(2) 友の会会報　第61号（平成26年３月31日）

2. 例会・講座等の開催

(1) 講演会（総会開催時）　平成25年５月18日(土)　五島軒本店　参加者37名

演　題　博物館流「函館・街なか再発見」のススメ

講　師　函館市北方民族資料館　学芸員　長谷部　一弘　氏

(2) 道南の博物館施設等めぐり　平成25年６月23日(日)　参加者35名

一本栗地主神社、七飯町歴史館（七飯町の歴史と文化財）、箱館戦争勃発の地　ほか

解説者　七飯町教委文化財係長　山田　央　氏

七飯町歴史館友の会顧問　高石　孝一　氏

(3) 私立函館博物館企画展の見学会

「新島襄と幕末の箱館」　平成25年８月30日(金)　参加者　19名

解説者　私立函館博物館主査　野村　祐一　氏

(4) 博物館明治村と伊勢神宮等を巡る旅（研修旅行）の実施　平成25年11月12日(火)～14日(木)

名古屋城、徳川記念館、博物館明治村、犬山城、からくり人形記念館、伊勢神宮

(5) 会員発表会　平成26年３月29日(土)　五島軒本店　参加者108名

テーマ　『願乗寺川物語』　発表者　木村　裕俊　氏

(6) 私立函館博物館企画展の見学

①「箱館商人の人生模様」展　平成25年４月23日(火)～５月31日(金)

②「新島襄と幕末の箱館」展　平成25年６月14日(金)～９月１日(日)　団体見学

③「新収蔵資料」展　平成25年９月21日(土)～11月１日(日)

3．博物館事業の後援・協力

企画展、博物館講座等の後援および協力

現在、次の企業・団体から協賛を頂いております。改めて御礼申し上げます。

・(株)エスイーシー　・金森商船(株)　・(株)建築企画山内事務所　・(株)五島軒　・五稜郭タワー(株)

・(株)佐藤公郎建築設計事務所　・(有)三和印刷　・(株)千秋庵総本家　・㈶相馬報恩会　・名美興行(株)

（敬称略・50音順）

市立函館博物館友の会会報　No.62

発行所　市立函館博物館友の会

印刷所　㈲三和印刷

電話 0138(45)0845

平成26年３月31日　発行

函館市末広町19－15　郵便番号040-0053

市立函館博物館郷土資料館内　電話0138(23)3095

振替口座　函館02650－0－2216